

日本的な農業、農学とは何か—最近の研究動向より—

2013. 3. 9 関西農業史研究会 徳永光俊

2007. 9. 8 「現代日本農学の批判的検討」
2009. 9. 12 「現代日本農法論の構築に向けて—研究会の学統の継承」
2010. 10. 9 「農法史からみた日本農学原論序説」
2012. 3. 10 「動態的風土均衡論としての『合わせ』の日本農法」

I 日本のなるもの

中岡哲郎『近代技術の日本的展開』（2013 朝日選書）

「日本の文化的伝統のなかには、海の向こうから来る珍しいもの美しいものに好奇の目をみはり、次にそれを自分で作ろうとする姿勢が体質化されているのではないだろうか。そして、それが幕末期に西から来た『近代』の衝撃に、日本の『在来』が圧倒されるのではなく、アクティブに反応し、独自の発展を開始することを可能にさせたのではないか・・・その体質は、あきらかに日本の地理的条件に支えられて、古代から形成されてきたものだ。」
(5頁)

「開港とともに西からどつとやって来たものを『近代』の衝撃と捉えるなら、『在来』のなかにあったこの文化の体質は、『在来』が『近代』に圧倒されるのではなく、またそれを拒否するのでもなく、西から海を越えてやって来たものに対して好奇の目を輝かせ、積極的にそれらを取り込んで、『在来』が新しい発展を開始することを準備し助けた」(11～12頁)

「日本の産業革命」(発展段階論、世界史の発展法則論への批判)ではなく、「後発工業化」ゆえの独自性と特徴を見る(在来産業と地方都市のセット)(106～113頁)

江戸時代に「日本の労働集約的農業が西欧を抜く土地生産性を達成したことは認めるが、それを『勤勉革命』と名づけて、イギリス『産業革命』に匹敵するもう一つの『近代』の画期とすることは、ことばの遊びではないか。」(23頁)

参考：中岡の前著『日本近代技術の形成』（2006 朝日選書）

在来産業と移植産業の相互補完性「生産の流れのなかで在来技術と移植技術が接するところでは絶えず矛盾が生まれるが、その矛盾を次々と解決してゆくことで、発展を生み出す」
(422頁)

山口晃『へんな日本美術史』（2012 祥伝社）

「よく日本文化にはオリジナリティがなくて、全部大陸の模倣ではないかと言われてたりもするのですが、このようにちゃんと取捨選択は行われているのです。取捨選択の何処にオリジナリティがあるのかと言われてそうですが、それができるのはキチンと軸を持っているからです・・・最初に粗い網にかけて節操もなく採り入れた物を、時間をかけて取捨選択して、何代かかけて“こなしていく”と云うのが日本文化の『オリジナリティ』の源です。そのこなしていったものが3代も続くと、それは元から見たら全く別の物になってしまう。必要があればいくらでも独創は生まれます。」(89～91頁)

「文化と云うのは、それを発生させた事よりも、育てていった事のほうが大事と申しますか、その育む行為自体が文化と云うものの実体であるような気がします。つまり、最初は

他所から持ってきた物であっても、こねくり回している内に何か違う物を生み出す力であり、その『こねくりポイント』を見つけ出す力こそが評価されるべき点だと思うのです。日本人はこういったヘンなものを取り入れるのが好きなのです。」(92～93頁)

宮島新一『2万年の日本絵画史』(2011 青史出版)

日本美術の特徴①宗教美術以外の、美を楽しむための造形作品が各時代にわたって豊富に残されている。②美術の歴史が人々の欲するままに展開している。宗教美術においても自然な展開を遂げている。③たえず他の国から影響を受けながら完全には同化することがなかった。(3頁)

『優美さ』こそが一貫した日本美術の目標であった。・・・『ほどのよさ』と言い換えることができる。『洗練』と『素朴』の間、『理想』と『現実』の間、『力強さ』と『はかなさ』の間、『自然』と『人工』の間、こうした微妙な味わいを大切にするのが日本文化の独自性ではないだろうか。それは美術に限った話ではない。あらゆる分野に及んでいるはずである。」(355頁)

辻惟雄『日本美術の歴史』(2005 東大出版会)

「外来美術の影響下に目まぐるしく装いを変えながらも、その底にいつも変わらずあり続ける日本美術の常数・・・」①かざり②あそび③アニミズム (iii～iv頁)

宮本常一 日本文化の3層構造 『忘れられた日本人』『庶民の発見』など
近代西洋の外来 仏教・儒教文化の伝来 それ以前の日本文化(これが戦後まで芯棒としてあった)

以上の中岡の見方を日本農法史の流れに適用するとどうなるのか？

(稲を軸とした作りまわしから畿内(おもに奈良盆地)のイメージより)
(藤井平司 1983) 天然農法? フローへ?

21C	冬期湛水	無肥料	無農薬	不耕起	(岩澤信夫 2003)
			自然農法・有機農業		反・人工農法③
20C末		有機肥料	減農薬		
			循環の切断		人工農法③
20C半ば	施設	化学肥料	化学農薬	機械	
			小農家族集約多毛作農法		人工農法②
17C	開発・資源限界	内包的発展への転換			
	外延的拡大は、まだ続く				人工農法①
14C	乾田化(基盤整備)→	多肥化(増収)→	深耕化(安定)	ストックへ	
	外延的拡大(水稻農耕の普及	開田	12C二毛作の開始	14C大唐米)	籾桶の出現
2800~2700年前	朝鮮半島南部からの	水稻農耕の伝来			自然農法
農耕開始	冬期湛水	無肥料	無農薬	不耕起	フロー
7000~6000年前	穀物や豆類の半栽培・栽培	4000年前	イネ他の植物栽培の比重高まる		

II 地域の独自性 農業の独自性

最近の大島真理夫の研究より

大島真理夫編『土地希少化と勤勉革命の比較史—経済史上の近世』(2009 ミネルヴァ書房)
「経済史における勤勉革命論の射程—地域の個性を把握する方法」(『経済史研究』15号)
「勤勉革命」を資本と労働の視点ではなく、土地と労働の視点から見る
土地希少化への対応の違い 勤勉革命：労働投入の増加→土地利用の高度化→収益の増大
イングランドと畿内との農業比較 それぞれの国や地域の「近代」には、自らの「前近代」
から受け継いだものが色濃く反映している。地域の「個性」。個性を理解するためには、風
土という要因が無視できない。地域認識における風土論復権。マラソン型歴史認識（先進
—後進の発展段階）ではなく、地域の個性を尊重するサファリー型歴史認識。川喜田二郎

最近の田中耕司の研究より

杉原薫他編『地球圏・生命圏・人間圏』(2010 京大学術出版会)「東アジアモンスーン地
域の生存基盤としての持続的農業」① 「温帯」から「熱帯」への視座の転換
杉原薫他編『講座生存基盤論』第1巻(2012 京大学術出版会)「生存基盤持続型発展経路
を求めて—『アジア稲作圏』の経験から—」②

柳澤雅之他編『講座生存基盤論』第2巻(2012 京大学術出版会)「樹木を組み込んだ耕地
利用—作物の時空間配置から熱帯の未来可能性を考える—」③

「東アジアモンスーン地域」(温帯の狭義の東アジア、亜熱帯・熱帯の東南アジア)

「草木深し」の自然基盤(=風土)に立脚した「アジア稲作圏」 作付規制のない自由式、
水田および畑における多毛作体系である高度な土地利用集約型農業による生存基盤の確立
温帯圏：水平的な多毛作化 熱帯圏：水平的に加え樹木作物を組み込んだ垂直的立体的な
多毛作化 両者とも商品作物を組み込む 作付規制のある輪栽式の西欧農法との違い ①
温帯から熱帯への技術移転の歴史 「植民地化」「緑の革命」 多毛作化・商品化を推進
しかし「植民地状況」や近年の生存基盤の弱体化への反省

農業の多面的機能や農業の価値に「気づき」はじめた農民、「現場」、「当事者」と周囲との
協働や「南」から「北」への連鎖による生存基盤の持続的発展へ ②

農業は「自然の構想的利用」の営み 東アジアでは「小農」が担い手 小農の構想力によ
り自然の構想力を巧みに寄り添い、多毛作化を実現してきた

性急な動力機械化ではなく、「在来」技術を活かした農業技術の改良と開発 「外来」農業
技術の導入による鵜呑みの近代化ではなく、「オルタナティブ」な開発の道の模索 ③

*「自然も技術的であり、自然も形を作る。人間の技術は自然の作品を継続する・・・構
想力の論理は両者を形の変化の見地において統一的に把握することを可能にする」(三木清)
から、祖田修は、農業は「自然の構想的利用」の営みであるとする(『農学原論』2000 岩
波書店)

*栗原浩『風土と環境』(1988 農文協)「作物が風土を受け入れながら、その喜びや悲し
さを微妙に〈かたち〉に表現している」「作物は口はきかないけれども〈かたち〉に敏感に
反応する」「作物はわが種を残すため、風土を受け入れながら懸命に生きていく、その経歴
として〈かたち〉が形成される」「作物を総体的にみるとは、作物の主體的な生き方に依拠
することである」

野田公夫『日本農業の発展論理』（2012 農文協）

飯沼二郎の風土論に依拠しながら、構造政策（多数の零細経営を淘汰し、一部の大規模経営に政策的支援を集中し、産業としての農業に転換）により、世界農業を4類型に

玉真之介『グローバリゼーションと日本農業の基層構造』（2006 筑波書房）

「土地問題史観」への批判 小経営的生産様式による家族農業（ファーム・ファミリー・ビジネス）が世界農業の一般

最近の**神門善久**の研究より 『日本農業への正しい絶望法』（2012 新潮新書）

日本農業の本来の強みは技能集約型（総じて小規模・小資本・労働集約で技能を持つ）であったが、今や消失の危機にある。マニュアル依存型農業（大規模と小規模、化石依存型と粗放型、有機栽培と慣行栽培）と趣味型農業（週末農業など）

宇根豊『百姓学宣言』（2011 農文協）

方法：①土台技術＝技術の主体の発見 ②百姓仕事＝非技術の発見 ③内からのまなざし＝百姓の世界認識の発見

原則：百姓仕事が土台 ②経験と感性が大切 ③近代化に対抗 ④人間中心主義からの脱却 ⑤表現すること・・・

尾関周二他編『〈農〉と共生の思想—〈農〉の復権の哲学的探究』（2011 農林統計協会）

総論：〈農〉と共生の思想が照射する近代文明の転換—〈農〉の人類史的意義と持続可能な社会 終章：日本社会における〈農〉の復権の根本的意義と緊急性—現代の“人間の危機”克服と共同性回復の視点から

Ⅲ 日本のな農業、農学とは何か

まわし（循環）←→（効率） ならし（平準）←→（競争） 合わせ（和合）←→（対立）
作りまわし・手まわし・世まわし→食べまわし→生きまわし→天地のまわし（お天道さま）
おかげさま・おたがいさま